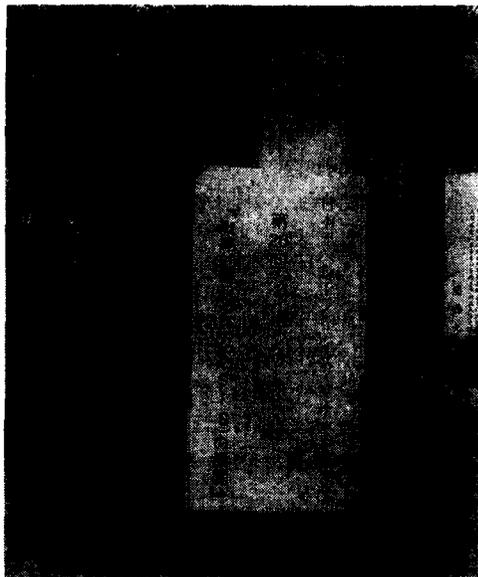


## 第26回シンポジウムルポ

関西大学 森 健一

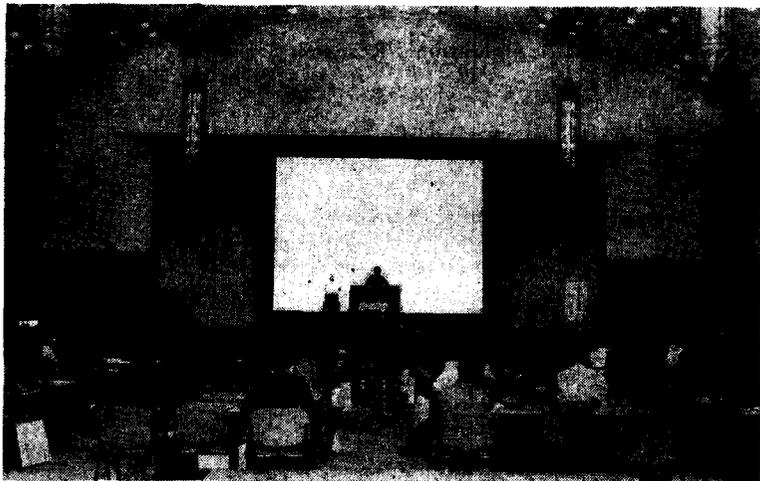
平成3年度秋季研究発表会の前日である10月15日に関西大学百周年記念会館にて第26回シンポジウムが「戦略的情報システム(SIS)の展開」というテーマで開催された。今回のテーマの主題は、経営情報システムの現状ならびに将来のあり方を示唆するものとして、ブーム的な状況にあるものである。さらに企業サロンがこしばらく続けているテーマとも関連があり、同委員会よりのご助力をいただくこととなった。また、研究発表会のメインテーマである「経営の国際化」での招待発表ならびに講演の内容とも関連があることもあり、約140名という多数の参加者をむかえることができた。テーマの考え方としては種々あるが、SISをその歴史的展開、ハードとしての情報ネットワークの形成、事業展開の推進力としてなど広い観点からの議論を展開しようという意図があった。これにもとづいて、発表内容、発表者を選定し、多角的な内容のプログラムが得られたといえる。

講演の具体的な内容としては、午前中にSISの基本的な構成についてのもの、午後の前半で実際のシステム展開を、ついで企業サロンよりの協力をいただいた内容



というようになっている。以下で、個々の発表の概要について報告していこう。まずは、今回の立案者の1人である森(関西大)が挨拶を兼ねて以下の発表の導入になるような事柄について述べ、M. Porterの戦略要因図をもとにして、具体的なSISの位置づけが可能なことを示した。

つづいて、第2番目の講演者の藤基氏(住友金属情報システム)が「SISの構造と歴史的展開」について話された。氏は鉄鋼業での情報部門を担当された多年の経験より、初期の生産管理のシステム化、オイルショック後の立ち直りに情報システムの果たした役割など歴史的な展開をさされた。すなわち、初期のMIS論議と関係しない地道な情報化の展開、そして通信との結合による内、外部のシステムとのネットワーク的な展開という段階がある。この経験がもととなって情報ネットワークの役割の再認識へと発展し、経営戦略との結びつきでSISとして結実したプロセスを述べられた。企業の戦略の立案と推進をいかに情報システム、技術が支援できるかがその要点であろう。



シンポジウム風景

ついで、第3番目は林健二氏(NTTデータ通信)により「情報ネットワークの技術」についての講演がなされた。同氏は、データ通信の技術を長年担当されている。話しの内容は、NTTの一般向きVANサービスであるTWIN'ETサービスについてのものが中心であった。大規模なネットワークを構築する場合は、自社専用というシステム化が考えられるが、扱う情報量によってはこの種の一般向けの共用システムを用いる方が、信頼性、経済性などの点から有利である。また、サービスのタイプも種々な形態があり、それらを組み合わせることによって望みのシステムを形成し得ることが示された。

以上で午前プログラムが終了して午後の部に入り、第4番目に渡部弘氏(日本IBM)より「製造業におけるSIS」の講演があった。氏は社内の情報化が製品の差別化戦略の推進力になるという観点から、いわゆるCIMが製造業におけるSISと定義され、同社でのそのシステム化について話された。基本的に、同社はグローバル展開がその中心であり、どの顧客にも同様のサービスがなされるようなシステム化を意図されている。非常に大規模なものであると同時に、個別のサブシステムについても工夫がこらされていることがうかがえた。

ついで、第5番目に高月敏晴氏(アジア太平洋トレードセンター)の「流通業におけるSIS」という講演がなされた。まず、ダイエーにおける顧客システムの経験が話された。そこでは、店頭でのシステムという関係から、すぐ競争企業がキャッチアップしてくるということである。また、情報システムだけではダメで、流通チャンネルの問題、形態の問題を考えるリストラクチャ化、モデル化などをやる必要性を強調された。そこでのSISは多分、流通革命といわれる現時点での流通の改変と大きくかかわっているものと推察される。

次の講演からは企業サロンのそれとなり、第6番目に「再春館のインテリジェントマーケティング」というテーマで、同社の西川通子社長が話された。まず、再春館製菓所を立て直す手段としての電話とTV、新聞などの媒体広告を利用した事業展開を始められたということである。現在では、化粧品と漢方薬を扱っておられ、コンピュータによる顧客管理、コミュニケーターによる電話連絡によって固定客をつくるという戦略をとっている。このために大型のコンピュータと光LANを使って、情報量および伝達の能力を高めている。このため、熊本という地方都市に位置しながら非常に高い業績を挙げておられ、まさにSISの典型例といえる。スライドを利用さ



再春館製菓所 西川社長

れたり、熊本弁をまじえられたりでユーモアに富んだ話しぶり、聴衆をあきさせなかった。

最後の講演は、梅沢豊先生(東京大学)による「SIS隆盛の社会・経済的背景」であった。SISを従来の大量生産体制から顧客志向の多品種小量生産への変革での情報技術の有効利用と定義され、それが本質的なものになってくることを示唆された。そして、現在多くの企業では情報システムにとどまらず、流通や販売のシステムの再構築を行なっているとみれる。そしてORがこれらの問題を扱い得る学問の1つであることに言及され、しかも数学的な表現ではなく、経営の言葉でなされるべきだとされた。

経営情報システムは今日にいたるまで、MIS、DSSなど多くのパラダイムを求めてきたが、情報技術が高度化した今日においてはじめて、本当の思想をもてるのではないかと思う。その内容は、当然、経営の支援をなし得るものであろう。この文脈から、その基本は経営戦略的なものとなろう。本シンポジウムにおいても陰に陽にその方向性が感じとられた。また、それは設備や機械などのハード面、経営システムのようなソフト面をも巻き込んだリストラクチャをも引き起こすことになろう。今回のシンポジウムの盛会は、企業、学界におけるこの種の問題への高まりを示しているものととれる。そしてさらにいえば、ORワーカーからのSISへの興味の高まりを示しているものといえよう。